

たいか 天下無双の大廈、出雲大社巨大柱の発見

出雲大社境内遺跡（出雲市大社町）、調査年：2000（平成12）年

松尾充晶

出雲大社の発掘調査が進められていた当時、地元の大社町教育委員会には文化財の専門職員がいませんでした。そこで技術支援のため、県埋文センターから私が調査に参加することになり、3月初頭から発掘現場の最前線で苦闘していました。4月5日に巨大なスギ材1本が見つかり、かつての出雲大社本殿の柱であることがわかると、報道機関の取材合戦が白熱することになります。その最大の関心事は、「柱材は1本だけなのか、それとも“幻の束ね柱”なのか」という点にありました。出雲大社の宮司、千家家に伝わる古図「かなわのごそうえいましず金輪御造営差図」には3本束ね柱の本殿が描かれていますが、そのような特殊な高層建築は实在自体が疑われていたからです。

4月22日は土曜日のため発掘作業は休みでしたが、調査の行程が遅れており、私は図面を描くため現場に出勤することにしました。釣りに行く予定を変更してTさん（当時、県文化財課勤務）が手伝ってくれます。柱穴の土層断面図を朝から描き続け、日が傾き始めた夕方5時前のことでした。巻き尺の目盛りを読む役のTさんが、1本だけ見つかった柱材となりの土を指差して「か、なんだや？（これは、なんだ？）」と大きい声を出したのです。指差す先には、2本目の柱材である巨木の肌がわずかに顔を出していました。これが、束ね柱確定の瞬間でした。ひと目でその意味がわかったTさんと私は、無言でがっちりと握手したのです。

その後の分析で、見つかった本殿跡は鎌倉時代（宝治2（1248）年）の造営であることがわかりました。『古事記』『日本書紀』では国譲りに由来するとされ、平安時代には「天下無双の大廈」と讃えられた出雲大社の高く大きな本殿ですが、中世には造営が困窮し、規模

が縮小したことが知られています。出土した鎌倉時代の本殿は、古代を通じて繰り返された大規模建築の更新が難しくなっていた中世への過渡期にあたり、いわば「最後の高層神殿」ということができます。巨大な用材の確保が難しくなったため、合成材として大きな柱を作るための工夫が三本束ねの構造ではないか、「金輪御造営差図」はそうした「最後の高層神殿」の姿を伝えるための記録ではないか、という説も出されるようになりました。

神話に強調される古代出雲の特殊性は実体の無い虚構である、という見方もありますが、国譲り神話にちなむ出雲大社本殿が特異な大型建築として実在していたことは、この発掘調査が証明したと言えるでしょう。人類史上、最大の木造建築柱材の発見であり、それが大勢の参拝客が見守る中で調査されたという点においても、「天下無双の発掘現場」だったと思います。 (古代文化センター専門研究員)



束ね柱確定の瞬間